

読者大賞

伊能図の未踏地広し秋茜

中島 滯

*伊能忠敬を題材とした映画の一場面に、大広間一面に拡げられた手書きの日本地図があった。現代の衛星写真とほぼ誤差のない正確さと同時に、それを一歩一歩実測したことに驚嘆する。人生をかけても足りぬほどの時間と、それにかけてもまだ届かぬ未踏地の地図の白さに、思わず暗澹たる気持ちになるが、しかしその時見上げた空は青く澄んで、スイと横切るトンボの姿にまた頑張ろうという勇気を貰う一句。

△選者・小川佳作▽

△選者・高野佳作▽

パスワード不一致銀河に立ち尽くす

渡辺 徹

*パスワードやPINだとかの入力要求が多すぎて、困惑させられる。うまくいなくて、途方に暮れてしまう。まさに、広大な銀河の中に孤立させられているような絶望感に捕らわれることになる。

△選者・津川佳作▽

△選者・正木佳作▽

龍天に昇るやドレッシング分離

東徳門百合子

*想像上の季語「龍天に昇る」がよく効いている。春はサラダがよく似合う。でも優しい感じの句はもう飽きた。「ドレッシング分離」の状況は確かに龍がいる感じだ。しかも、ドレッシングから龍が出たら、スパイシーで生命力をもたえるサラダがいただけそうだ。「龍天に昇る」と省略せずに使ったのもよい。

△選者・正木特選▽

斬新な配合である。時空を超えた壮大な夢想と、極めて日常的な水と油の分離。しかしよく味わえば比喩のようでもあり、さらに天の瓊矛（ぬほこ）の神話の逆をいくようでもある。（正木）

読者準大賞

読者賞候補作

読者賞候補作

好きでゐること短くてソーダ水

富野香衣

*熱しやすく冷めやすい若者の恋と、その恋人達の真ん中に置かれたソーダ水との、「付いている」取り合わせ。甘やかで、気泡の光が弾けるソーダ水もあつという間に気が抜けてしまう。しかし、この句を、酸いも甘いも弁えた大人が、遠くからはらはらして、もしくは、にやにやして、はたまた「やれやれ」とため息をついて恋人達を眺めている、と読むと、たちまち滋味深くなる。大人からの青春賛歌、恋人たちへのエールとなるのだ。

△選者・津川佳作▽

風揚げて因幡の風を子に持たす

村上万亀重

*風揚げの糸を子に持たせるのは心配であり、反面、子の成長を感じられる瞬間でもあります。また、子が風を受けてもそばで見守る親の優しさのあふれた句であり、不安と期待の入り混じったワクワク感のある句だと思います。

△選者・大串特選▽

「因幡」というと日本神話に出てくる「因幡の白兔」を思い広い白兔海岸を思う。この句、空に舞う風の糸を子供に渡し、「因幡の風」を「子に持たす」と言ったところが佳い。(大串)

読者賞候補作

木の実落つ一句拾つて帰りけり

森 加名恵

*木の実という小さき物に対する心情が詠まれている。小さな木の実を持ち帰り、自分の引き出しにでも収めるのでしょうか。

△選者・大串秀逸▽

「木の実」ではなく「一句」を拾って、と言ったところが面白い。いかにも俳人らしく俳諧味がる。一体どんな句を拾われたのか。それが此の句だとすると正に即吟の名手。(大串)

△選者・石佳作▽

ゴンドラは光の器春来たる

常澤俣子

*遊園地には親子、家族、友人どうしの幸せな顔があふれている。遊園地のシンボルであるゴンドラの一つひとつから、笑顔や楽しそうな会話が聞こえてくるような、そんな幸せが感じられます。

△選者・石佳作▽

△選者・井上佳作▽

△選者・夏井佳作▽

語り部の子も語り部に梯梧燃ゆ

相良研二

*梯梧は沖縄の県花、燃えるような赤い花である。沖縄戦の語り部のことであろう、語り部の子がまた語り部となって伝えゆく歴史。この句に、かの沖縄戦のことはひとつも触れられていないが、下五の梯梧の描写で、燃えさかる戦火の赤い炎が辺りを埋め尽くす映像で終わる。鎮魂の句である。

△選者・小川佳作▽

△選者・黒田佳作▽

硝子屋が来て秋雲を替へてゆく

波切虹洋

*割れてしまったのか。あるいはリフォームか。いずれにしろ見慣れた硝子の向うに映る景色は、硝子屋が来たことにより一新するのである。真新しい真っ白な雲に違いない。清々しい秋空の雲である。さて、持ち帰られた硝子は今どんな秋雲を映しているのだろうか。

△選者・高野佳作▽

△選者・夏井佳作▽

万緑に飴ポルシエの加速音

西村 泉

*上りの山道を加速する車の音が印象的な一句です。

△選者・小澤佳作▽

行く秋のドライブインに星の地図

宮本豊子

*冬が近づき、ドライブインの空気も冴える。キッパリとした夜空に浮かぶ星々もその配置を変えて行く。移ろい行く季節を感じる一句。

△選者・石佳作▽

引鶴に海原かぎりなく蒼し

水間千鶴子

*しばらく盆地や平野に留まっていた鶴にとって、久しぶりに見る海はかぎりなく蒼く感じるだろうと想像でき、句に説得力がありました。中七から下五を句跨りにすることで、海の広さを上手く表現できていると思います。清々しい気分になる句です。

△選者・宇多佳作▽

どよめきて佐渡の傾く船遊び

村上万亀重

*とにかく景の大きな句である。傾いたのは船であるが、それを佐渡が傾いたと表現したのがいい。そして、それは、船遊びをしている自分たちのどよめきによって傾いたのである。舟遊びを満喫している様子が否応なく伝わってくる句である。

△選者・夏井佳作▽

胡麻叩く祖母の傍ら眠る嬰

窪田孝子

*農作業の忙しい中、スヤスヤと眠る赤ちゃんの姿が対照的で、お婆ちゃんの思ひやりが伝わります。

△選者・小澤佳作▽

読者賞候補作

読者賞候補作

読者賞候補作

読者賞候補作

狼やふるさとの川細りゆく

小栗しづゑ

*上五の「狼や」は、まるで狼に呼びかけているようだ。日本狼は絶滅したと言われて久しい。野山を縦横無尽に駆け回っていた狼は、未開で豊かであった森や草原の記憶に重なる。ふるさとの川はコンクリートで整備され、生き物は減り、出水があつても水が逃げる水田さえ無い。喪失感が蒼白く揺らめいているような句である。

△選者・高野佳作▽

長く長くりんごの皮を剥き独り

福田 漣

*哲学的な句だと思います。日常の中に静かに存在する孤独を感じます。そして、独り。この句の「独り」には、様々な背景が浮かびます。

△選者・小澤佳作▽

朝燕ひかり啜えて来たりけり

舘 健一郎

*朝早く飛び交う燕が、朝の光を啜えて来たという措辞が素敵な一句です。

△選者・井上佳作▽

種選りの口をすぼめて土間の闇

山口仁久

*種の良しあしが次の年の収穫の成否に繋がる、という農家の人の真剣さが「口をすぼめて」という景に、的確かつ仄かなユーモアで表現されている。「土間の闇」としたところに、種選りに手間がかけられている時間の経過だけでなく、詠み手の、見通し定まらぬ来年へのかすかな不安までが込められているのではないだろうか。味わい深い句である。

△選者・正木佳作▽

読者賞候補作

読者賞候補作

読者賞候補作

読者賞候補作

また一人露地へ折れゆく夜寒かな

神成石男

*外灯の仄暗い冬の道路を歩くのは頼りなく不安なものだ。それでも、少し前を歩く人の靴音を聞きながら家路を急いでいるのだが、いつの間にか、一人また一人と、右へ左へと消えて行ってしまう。冬の夜の寂しさが、ひしひしと伝わってきた。

△選者・大串佳作▽

戻ること叶わぬ祖国星月夜

折勝家鴨

*ウクライナやミャンマー難民、或いは中国残留孤児を詠んだ句だろうか。祖国を離れ遠くがあり、同じ夜空の星の下に自分が今いる土地も祖国もあるのだが、戻りたくても戻れない祖国。その望郷の念が星月夜に託されてしみじみと伝わってくる。

△選者・井上佳作▽

鍬の柄に古き刻印雲の峰

丸山静子

*毎日畑を耕し、大切に使っている鍬。一休みしたときに、鍬の柄に古い刻印を見つけた。思わずさすったのかもしれない。空を見上げると、入道雲がもくもくと湧いている。さあ、もうひと仕事するかという作者の思いも感じられる。

△選者・石佳作▽

啓蟄や予約の要らぬ島の歯科

三宅忠昭

*「島に一軒の○○」という句はしばしばみられるが、予約の要らぬと歯科の実情を具体的に書いたのがいいと思う。そこに着目したということは、この島へ移住してきたのだろう。不本意な移住だったかもしれない。しかし、すぐに歯の治療をしてもらえらるという安心感もあり、この島で暮らしていこうという決意が啓蟄という季語に表れていると思う。

△選者・石佳作▽

読者賞候補作

読者賞候補作

読者賞候補作

読者賞候補作

石に影草に風秋立ちにけり

松本武千代

*この句は最高にブラボーです。四季の移ろいを実に謙虚な心で写しとっていると思います。自然と向き合う時の優しくも、それでいて細やかな研ぎ澄まされた感覚には本当に敬服します。

△選者・宇多佳作▽

曼珠沙華太古の空の青さかな

細川風緒

*「太古の」を入れることでとてもなく時間的、空間的な広がりを感じさせるようになっていく句だと思います。最後の「かな」は、その広がりの中にそっと自分を置くが如くに、何か余裕を感じさせます。

△選者・宇多佳作▽

たんぽ、や東北の忌と言ふ勿れ

宮崎 こうや

*一部では東日本大震災の日を東北忌として季語として採用していると聞かれますが、東北は死んでない、春を待ったんぽのように身をかがめ、踏みつけられても、春が来れば元通りの花を咲かせる。だから東北忌と言うという気概と不屈の闘志と郷土愛を感じさせる句である。

△選者・高野佳作▽

手のひらに蟬を隠して父帰る

土屋 幸代

*家に帰りにくい事情のある父の、複雑な心境が蟬を持つ手にあらわれているように感じました。最近では友達のような親子関係もあるでしょうが、父と家族の距離はお父さん本人が思っているよりもちょっと遠いように思います。

△選者・小澤佳作▽

読者賞候補作

読者賞候補作

読者賞候補作

読者賞候補作

スチームの金属音や朝の会

相澤 美穂

*朝の会はとても爽やかだけど金属音はうるさい対比の感じがいいなと思った。

△選者・夏井佳作▽

天へ地へ伸びて立夏の心柱

中島 滂

*天へ伸びるだけならばありふれているが、この句には双方向へ伸びて天地を繋ぐエネルギーの壮大さがあり、季語がそれを一層際立たせている。最後の特別公開を終えた薬師寺東塔の心柱へ、畏敬を込めて爽やかな感動を捧げる一句。

みどりごを白寿の腕へ冬の月

中島 滂

*空の丸い月と地上でみどりごを抱く円を描く腕、冬の月は白く白寿と響き合うが、月は冷たいのに対し、みどりごを抱く腕は柔らかく温かい、という対比が美しいと感じました。

冗談にそ知らぬ顔や秋の猫

中島 滂

*秋の夜、家族と猫の静かな時間が流れている。家族の会話に冗談も飛び出すが、猫は聞いているのかいないのか、そ知らぬ顔のまま、その穏やかな風景の中におさまっている。

頭からセーターを脱ぐけふを脱ぐ

佐藤雅之

*一日の終わりを日常の当たり前の動作で表現しているのだが、セーターが頭を潜る瞬間に今日と明日が入れ替わり今日の感慨と明日の希望を感じさせる句になっている。「脱ぐ」のリフレインも効果的に働いていると思う。

読者賞候補作

読者賞候補作

読者賞候補作

読者賞候補作

読者賞候補作

ひたむきなヤングケアラー冬に入る

竹澤 聡

*以前ニュースで小学生の十五人に一人がヤングケアラーだと知り、衝撃を受けたことがあります。まわりの同級生が元氣よく遊ぶ中、親や祖父母の世話をする生活はかなりの忍耐を要することと察します。「ひたむきな」という言葉がヤングケアラーの特質を言い得ており、また「冬に入る」も的確な季語だと感じました。

生くるとは少し酔ふこと花万朶

藤嶋やんま

*良きにつけ悪しきにつけ、この世に生を受ける生きとし生けるものは活動することによってエネルギーを放出し、やがて天寿を全うするもの。命の時間の長さは各々だが、ほとぼしる命の営みは、花が咲き乱れ、その花が自然界の風を受けて輝くなかで、なるほど酔うほどであると言う表現に感銘を受けた。

しやぼん玉いびつに生れて丸く果つ

玉井瑛子

*たしかに、しやぼん玉は吹かれて作られる時にはまん丸ではない。いびつである。そして、まん丸になって、破裂するのである。中七の字余り、少し気になるが、まあいいか。

虹だよとズック突っかけ駆ける君

太田正己

*「走る」ではなく「駆ける」としたことで、虹の出現がまさに飛ぶように嬉しいという君の気持ちが伝わってくる、生き生きとした句になっています。美しくそして温かな一句です。

昭和という長編だった風よ

北邑あぶみ

*昭和は六十四年まで続いた。開戦も敗戦も戦後も高度成長も内包し、まさに長編と言いつて妙である。そして最後に作中主体は、風よと呼び掛けている。冬の到来を告げる冷たい無彩色の風の中に立って老いの身に問うかも知れぬ。これで良かったのか。繋がる未来を案じつつ、今はもう無力な手をじっと見ているのかもしれない。

読者賞候補作

読者賞候補作

読者賞候補作

読者賞候補作

読者賞候補作

初任地へ付き添ふ父の四月かな

松本まさ子

*親元を離れて初任地へ赴任する子を、親として、そして人生の先輩として付き添う父の姿が浮かびます。

読者賞候補作

二巻に足らぬ注連縄樟大樹

佐藤雅之

*もとより大樹は尊崇の対象だ。長い歳月を生き抜いたものだけがもつ特別な重みがある。注連縄を二回巻いても足りないその太さに、犯しがたい風格が見える。

読者賞候補作

千枚が一枚となる青田波

奥山 功

*ひとつひとつは小さな田んぼでも、千枚が青田風によって一つの大きな波となっていく光景が浮かぶような一句です。

読者賞候補作

葉桜や陽の斑と遊ぶ吾子の指

高倉明子

*「陽」を詠みながら「影」をイメージさせるところが見事。「陽の斑と遊ぶ」で「影」を読者に見せることによって、「葉桜」全体が見えてくる。こういう句を作りたいと正直に思えたので選んだ。ありがちな「吾子の指」も、ここでは「葉桜」とよく合っていて効果的だ。

読者賞候補作

敗戦日捌く魚の骨白し

豊田義久

*捌かれる魚の骨と、戦争で死んでいった人間の骨。敗戦日に魚の骨を見ながら考えたのでしょうか。サ行の繰り返しのリズムも良い。

読者賞候補作

鼻奥のつんと八月十五日

塚本治彦

*八月十五日は終戦日。敗戦日と詠まれることもある。実質は無条件降伏を日本が国内外に示したことで、敗戦日が言葉として該当するのではと個人的には思う。さて、この季語は敗戦日でも、終戦日でもない。日にちを詠むことでそういった思惑を超えた普遍性を与えているのだが、鼻奥がつんとすると表現するのは、涙を流す時に鼻腔が反応するところを表現したのだろう。悲哀をあえて直接的な言葉を使わず雰囲気のみを詠ったのが妙味。

産み終へて喉をつるりと水蜜桃

関 美奈子

*出産後の安堵感がよく伝わる。喉を通る水蜜桃のつるりとした感触が、出産の痛みと生命の誕生と相和して、母を祝福している。

九十歳ざらとなる世のとろろ汁

多賀与四郎

*先月、母を失った。八十八歳だった。そのためか上五に「九十歳」と年齢を詠み込んだ俳句に目が止まった。九十歳という尊敬に値する年齢を人生の一つの通過点と捉えた明快さに共感を覚える。自分の歯を失っていた母は、するするっと食べられるとろろ汁を好んだ。私は、母を思い出し、半泣きしながら半笑いしながら、とろろ汁の俳句を楽しんで鑑賞させていただいた。

痛いのも生きてる証春を待つ

窪田孝子

*完全に治らないと辛いと思うのではなく、共に付き合って生きていく、前向きな考えが素敵だと思います。

ささくれし母の手恋し虎落笛

東岡敏枝

*歳を重ねてわかる母の愛が伝わり、その子はその母を慕っていることがよくわかる句だと思いました。

読者賞候補作

読者賞候補作

読者賞候補作

読者賞候補作

読者賞候補作

等圧線なだらかな日や春田打つ

山口仁久

*稲作は常に天候との駆け引きの日々である。その今年の一步目を踏み出す日。穏やかな日和がありがたい。今年の稲作も、なだらかでありますように。

読者賞候補作

ブラジルの未開地めざし薬掘る

池田雅夫

*地球上にはまだ治療法のない多くの病気があり、iPS細胞、遺伝子操作、或いは新規の抗生物質などによる治療法の開発や進展が待たれる。ブラジルの未開地のような場所では、原因不明の病気もあるが、その土地に特有の植物の根茎由来の医薬や土壌中の細菌由来の抗生物質があるかも知れず、発見が待たれる。そうした標的に果敢に挑む選出句に勇気づけられる。

読者賞候補作

除夜の鐘消えぬ介護のうすあかり

田村幸子

*大晦日も元旦も変わりなく日々を過ごす。除夜の鐘が、ひたむきに暮らす人々を静かに新年に送り出す。鐘の音が沁みる一句。

読者賞候補作

何物も持たざる自由青蜜柑

前畠一博

*何物を持たないことは、自由で身軽なことである。新鮮さを感じる句です。

読者賞候補作

立ちしまま虚数解く子や春の雲

富野香衣

*進級後、実在しえない数を頭の中で操ることを教わった。問題を考え続けていると、そうか！と解る瞬間がある。立ったまま解き続ける真剣な表情が見える。

読者賞候補作

栗飯や母すこやかに農婦たり

井端久子

*農夫ではなく農婦としたところに作者の気持ちが表示されていると思います。日々大変な農婦であることに誇りを持ち、美味しい栗飯を炊いてくれる大いなる母。

読者賞候補作

鉛筆の音のほかなき霜の夜

三宅忠昭

*カリカリと自分の鉛筆の音だけしている様子と、試験間近の寒い夜の情景が相まってよかったです。キンと冷えはじめた夜の静けさが目に浮かびました。音のあふれた毎日のなか、鉛筆の音だけが響くという場面にも共感しました。

日本に不文の掟去年今年

對馬埜梟

*去年今年という背景に「不文の掟」という、世の中を冷静に見ている言葉の組み合わせが目を引きました。暗黙の了解や忖度など、現代社会に広がっている、ちよつと窮屈な世界観をうまく出せているように思います。

病葉や真水乏しき水の星

上田鷺也

*言われてみればその通り、地球の水の大半は海、すなわち塩水ですね。人間の視点で水といえは真水であるのに対し、地球の視点では塩水になるのだなあと、ハッとしました。それから勝手な想像を容赦頂きたいのですが、もしやこの句は戦の絶えない世界を暗示しているのではないかと思えてならず、とても深い句だと感じました。

接続詞置いて遠のく秋の雲

河合 梟

*「接続詞」を想像すると描かれていないはずの男女が現れる。それから男女のストーリーを思い描くと、登場人物が一緒に見ていた「秋の雲」は確かに「遠のく」のに、読者の脳裏には「秋の雲」がいっぱいに広がる。「変化」を伴う雲「秋の雲」と「接続詞」のとりあわせも季語を不動のものとしている。

着ぶくれて膝に重たき広辞苑

品川和子

*私も経験があるので、よくわかる句です。着膨れたまま膝に広辞苑を置いたときの重さは、時間が止まるように重たく感じます。

読者賞候補作

読者賞候補作

読者賞候補作

読者賞候補作

読者賞候補作

群生といふさびしさに曼珠沙華

河村うら子

*曼珠沙華の持つ独特な雰囲気がそう思わせるのであろうか。華やかな群生の中にありながら、個々の自立を見せ孤独を感じさせる赤い花は、花外に長く薬を突き出し、繊細かつ大胆を装う。ある日突然花のあることに気づき、前触れもなく終わる。群生であれば尚更のこと。多数の中に孤独を感じさせる現代社会を見るような一句。

立春やしばられ地蔵ゆるむ縄

吉澤 仁

*どこかに心のゆとりがなければ生まれない句だと思います。春の到来と「ゆるむ」という表現が見事にマッチして、ほのぼのとしたえも言われぬ柔らかな雰囲気、何の気負いもなく醸し出しています。

心音のたしかなる夜の雪ほたる

桑原 稔

*心音のたしかな夜は、雪ほたるの小さな生命を感じるが、心音の不確かな夜は、生命のはなさを感じる。まるで波郷の心境を詠んだよう。

とんぼうのぎゆるんと風へ戻りけり

亘 航希

*蜻蛉が飛び立つ時は確かにぎゆるんという感じだと思いました。あつという間に風になってしまふ蜻蛉の姿が浮かぶ一句です。

敗戦の日や七歳の父の靴

土屋 幸代

*敗戦の日に七歳であった父の靴が写真に残っていたのだろうか、あるいは父が敗戦の日に履いていたボロボロの靴を、思い出として語って聞かせたのだろうか。敗戦という大きな区切りを七歳という小さな父親と靴に託した、その日を感じさせる句である。

さみしさは無色透明秋刀魚食ぶ

石井しおり

*さみしさに色があるなんて、これまでの人生で考えたこともなかったです。しかも秋刀魚を取り合わせるというセンス……感服いたしました。

読者賞候補作

標本の虫に番号原爆忌

川村胡桃

*原爆忌という季語も、戦争経験者が減少している中、戦争を経験したことのない世代は本質を理解できないのかもしれない。ところで「現実」と「現実的」を考えてみると、例えば間近にみる「死」よりも、映画で見る「死」の方が実はリアルに感じられることが多い。「現実的」に提示されるものが、実際の「現実」よりリアルに感じられるのは我々の心によるところが多いのだろう。さて掲句、標本の番号と表現したことで、原子爆弾被害の恐怖をよりリアルに提示してみてくれた。

読者賞候補作

この星に硝煙絶えず開戦日

十川長峻

*二〇二二年初頭から始まった東欧での戦争は、未だ終息せず、第二次世界大戦の日本の開戦日である十二月八日に至っても、硝煙は収まっていない。国連という平和のための国際機関があるので、大国がこの様なことを起すことは想定し難く、早期の終戦を祈るばかりである。

読者賞候補作

日時計の計りかねたる冬日かな

ひでやん

*冬日の光は弱々しい。特に、日本海側地域では。日時計の針の位置はおぼつかなく、時間の進みも心許なく感じられる。そんな感覚が表現されている。

読者賞候補作

「お疲れ」と産後の頬に青蜜柑

岡田郁

*大変な思いをして無事に我が子を産んでくれた妻への感謝と、父と母に成り立てのつかの間、ホッとしている安堵の気持ちを、青蜜柑がとてもよく表している。

読者賞候補作

戦塵にかたぶく地軸草の花

服部 まこと

*この地球上に生きる大方の民は草の花の存在であろう。北極と南極を結ぶ直線、その地軸の傾きにより私達の星は自転している。私は「かたぶく地軸」を政治と捉えた。その軸がブレるのである。絶えず世界のどこかで内戦があり、また、ロシアによるウクライナ侵攻も終わりを見せない。戦争に限らず、そのブレが気候変動を招き、世界中のいたるところで災害を引き起こしている。私達は何をすれば良いのか。この十七音に問われた気がした。

産声のひとりひと色チューリップ

茶和

*芽を出したばかり。どんな色に咲くのか。陽光のもと、花も子供らもすくすく育ってほしい。希望と願いの込めった一句。

秋空に包まれてゆく昼休み

奈美

*そのままに書いてる感じがいいなと思った。

秋冷やしづかに朽ちる聖火台

阿見 幸恵

*栄枯盛衰・諸行無常を感じさせる一句です。華やかな五輪を句材にしたところが秀逸です。

ハロウインの目鼻淋しき南瓜かな

武藤 主明

*ハロウインは賑やかな雰囲気だけれど、カボチャは目と鼻をくり抜かれる。その対比の表現がよいと思った。

読者賞候補作

読者賞候補作

読者賞候補作

読者賞候補作

読者賞候補作

読者賞候補作

木犀の金か銀かを嗅ぎわけて（点字）

西田健治

*私は、花の香りをかぎわけるといふ繊細な心遣いを持ち合わせていなかった。作者の鋭い感性に脱帽である。金子みすゞ風に言えば、私は木犀の花びらを見ていたが、見ていなかった。作者は木犀の花びらを見つめられなかったのに、見つめていた。ただ漫然と過ぎてしまう時間だが「人生の一瞬一瞬を一生懸命生きなさいよ」と教えられているような感覚に落ちいってしまった。